Japan Information-Culture Society

研究論文

非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」における「気づき」の効果

The effect of "Awareness" in Non-verbal Communication "Looking at Keitai(Mobile Phones) Displays"

中村 隆志　Takashi NAKAMURA
新潟大学人文学部
Faculty of Humanities, Niigata University

大江 ひろ子　Hiroko OE
横浜国立大学経営学部
Faculty of Business Administration, Yokohama National University

要　旨

本稿では，「ケータイのディスプレイを見る行為」に対する「気づき」が，自己理解や他者理解に変化を起こしうることを指摘する。筆者らは，「ケータイのディスプレイを見る行為」について，自覚的でないユーザが多いこと，また，その自覚を得ると共に，彼らに変化が起きることをこれまでの調査やインタビューを通して，認識していた。このことから，実験的なアンケート調査を立案した。「ケータイのディスプレイを見る行為」に対する「気づき」が起こるようなきっかけを被験者に与えた。その結果，自身の行為や他者の行為に対する理解に変化を起こした被験者が存在した。このことは，「ケータイのディスプレイを見る行為」に関する気づきが，対面的コミュニケーションに影響を与えうることを示す。また，「ケータイのディスプレイを見る行為」についての非言語コミュニケーションとしての認識が，広く一般に必要であることを示唆する。

Abstract

This study concluded that the "awareness" that comes about through "looking at keitai (mobile phone) displays" can change users' understanding of themselves and others. The authors have noticed through the past investigations that there were many unconscious users and that they have changed with the consciousness about "looking at keitai displays". Based on these examples, the authors devised an experimental investigation. The informants were cued to get the awareness and the change of users was clarified. The result was that many users changed their understanding of themselves and others. This means that the awareness that comes about from "looking at keitai displays" can influence our face-to-face communications. It also suggested that "looking at keitai displays" needs to be generally recognized as non-verbal communication.

1. はじめに

2009年2月をもって，NTTドコモのiモードサービスは10周年を迎えた[1]。iモードサービスの出現以降，ケータイ（携帯電話・PHSを総称する）は音声通話端末から複合的な情報端末へとシフトする。電子メール，Webの閲覧，時刻の確認，スケジュールの調整をはじめ，様々な機能がケータイに移植され，多くの人々が，一日に何度となく自分のケータイのディスプレイを見ている。この10年間で，人々は「ケータイのディスプレイを見る行為」を日常的な行動として完全に根付かせたと見て良いだろう。誰かがケータイのディスプレイを見ている様を目撃したければ，ほんの少し街や駅を散歩してみるだけですぐに発見できてしまう，そんな日常の風景が21世紀の00年代にできたのである。

多くのユーザが最も頻繁に用いるケータイの機能はメールである。2008年12月に行われたアイシェアリサーチの調査（20代から40代を中心とするネットユーザー417名の回答）では，「今年1年で，最も利用した携帯電話の機能は何でしたか？」という質問に対して，全体の54.7%が「メール」と回答し，2位の「音声通話」21.1%。3位の「インターネット」11.8%を大きく上回る結果となった[2]。メールが最も利用されていることを示す調査は他でも報告されている[3]。また，2006年10月のナンバーポータビリティ制度（MNP）導入以降[4]，ケータイキャリア間による契約者獲得競争のためのサービス提供合戦が継続している。3.5世代ケータイ端末の投入と搭載率の向上，供給されるコンテンツの大容量化に伴い，通信料定額サービス加入者が順調に増え続けており（2008年9月で契約比4割弱[5]），ケータイの情報端末としての利用シーンは益々増加傾向にある。出足が比較的低調であったおサイフケータイも利用者数が徐々に増加している[例えば，6]。今後とも，人々が「ケータイのディスプレイを見る行為」を行う頻度は，増加していく傾向にあると推測される。

ケータイのディスプレイを見る行為は，一般にマナー違反とはならない。この行為が明確な迷惑行為となる場面は一部の例外的な場面(1)に限定される。音声通話と比べて，マナー違反となりにくいため，この行為は「静かに」急速に普及したと考えられる。筆者は文献[7-10]において，「ケータイのディスプレイを見る行為」を，現実空間でなされる非言語のコミュニケーションと捉え，この現象を理解するためのフレームワーク作りに着手してきた。E. ゴフマン[11]の対面的相互作用，関与シー

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

ルド，対面的関わり等の概念がフレームワークの根底にあり，ケータイを利用する行為が与える現実空間への影響について，考察を進めている。

本稿では，「ケータイのディスプレイを見る行為」に対する「気づき」が，自己理解や他者理解に変化を及ぼすことを指摘する。文献[7]で行った学生アンケートの後，被験者にアンケート内容についての感想を聞いたところ，自分自身がたくさんケータイを使っていることに気づいた，あるいは，ケータイ利用について人前では気をつけるようになった，などの意見を聞くことができた。これらの意見が意味することは，文献[7]で被験者達に要請した自己観察そのものが被験者たちに「気づき」をもたらし，一定の変化を及ぼしている点である。これらの意見を参考に，「気づき」の効果が顕在化するような実験的調査を立案した。その結果，被験者が「用もないのに」ケータイを利用することに対して「気づき」を覚え，自己理解に対しては有意な変化を表す結果を，他者理解に対しては変化する傾向があると解釈可能な結果を得た。これらの結果から，「ケータイのディスプレイを見る行為」が非言語コミュニケーションとして広く認知されていく必要性を提唱する。

第2-3章で，これまでの研究を概括し，第4章以降では，「ケータイのディスプレイを見る行為」の「気づき」に関するアンケート調査の結果と考察，ならびに総合的な考察を述べる。

2. 「ケータイのディスプレイを見る行為」の効用

2.1 身体による演出

著者らは，連絡すべき用件があるわけでも，着信があるわけでも，すぐに見たいネットのコンテンツがあるわけでもないにも関わらず，ケータイを取り出すことを「用もないのにケータイを取り出す」と記述する。ここでいう「用もないのに」というのは，ケータイの通信機能を緊急に使用せねばならない状況にないことの意味である。これまで，筆者らは，「用もないのに」ケータイを取り出して「ケータイのディスプレイを見る行為」を行うことが，対面的な状況において，様々な使われ方をしていることを指摘してきた。

文献[7]では，多くのユーザが様々な場面で「用もないのにケータイのディスプレイを見る行為」を行っていることを指摘した。自室にひとりでいる場合を除き，「ケータイのディスプレイを見る行為」は，周囲に居る人々に意図的に向けられる場合があることを示した。また，ユーザが，ケータイのディプレイを見ている人に声をかけにくいという印象を持ちながらも，必要に応じて，意図的に自らその行為を用いることがあることを示した。

さらに，周囲の人たちとの距離，その場の視線のやりとりの仕方，男女差に対応して，ユーザは「ケータイのディスプレイを見る行為」を行う傾向があることを指摘した。このことは，ユーザは，通信機能や内蔵装置を利用するためでなく，周囲の状況に応じるために，ケータイを取り出していることを示している。「ケータイのディスプレイを見る行為」は，時に身体動作による演出の道具として利用され，意図的に用いられることを論じた。

2.2 公共空間で「用もないのに」ケータイ

文献[8]では，ユーザが公共空間において，「用もないのに」ケータイのディスプレイを見たくなる利用法が大きく3つに分けられることを示した。第1の利用法（ひまつぶし），第2の利用法（周囲からの視線を避ける）とも，以前から存在していたような，携帯可能で通信機能を持たない小物（文庫本，新聞，雑誌，手帳，腕時計など）でも利用されてきた使い方と考えられる。周囲からの視線を避けて，会話など「対面的かかわり」[(2)]の開始を拒否する第2の利用法は，ケータイ出現のはるか前から行われていた非言語的な行動であると推測される。

第3の利用法は，ユビキタスな遠隔通信機能を持つがゆえの利用法である。第3の利用法では，ユーザは，公共空間において自らの社会性や人間関係の存在を無言でアピールするためにケータイを用いる。この自己演出は，ケータイの出現によって，公共空間にいるユーザにもたらされた権能であり，このことを筆者らは「多重文脈性をまとう」と呼称する．

公共空間における第2，第3の利用法は，非言語的な行動であり，周囲に対して何らかのアピールを行うための演出として行われている。第2の利用法は，周囲に対して自らの存在を誇示することなく，その場に身体が存在していること自体が偶発的であることを含意している。一方で，第3の利用法では，その場に居ない誰かとの連絡可能性をアピールしながら，同時にその場にいる自己の存在を誇示している。自己の存在に対する認知を要求している点で，第2の利用法とは使い方が異なる。ケータイはかねてから需要のあった第2の利用法，すなわち，周囲の人々と相互作用を行うつもりがないことの態度表明の機能を受け継ぎながら，第3の利用法を可能にした複合的な非言語ツールとなっている。このような複合的な機能を有しながら，「ケータイのディスプレイを見る行為」は公共空間で機能しうる。

また，文献[10]では，全国規模の調査を行い，人々が公共空間で行う「ケータイのディスプレイを見る行為」についての一般的傾向を報告した。多くの一般のユーザが，公共空間で「用もないのに」ケータイを利用していること，彼（女）らが上記の3つの利用法を状況に応じて使い分けていることを示した。また，年配のユーザについては，若いユーザに比べて使用頻度は低いものの，若者と同じように公共空間で気まずさを感じ，「用もないのに」ケータイを用いてその気まずさを調節しようとすること，女性のユーザが，無言で周囲からの干渉を拒否することが必要な場面で「用もないのに」ケータイを用いる傾向があることを指摘した。

「ケータイのディスプレイを見る行為」は，身体的な演出として，意図的に利用されうる。公共空間では，多くのユーザが，その状況に応じた使い方をしている。このことは，公共空間という場が，「ケータイのディスプレイを見る行為」を必要としていた，とも言い換えることができるだろう。次に焦点になるのは，私的な場で親しい者と共に居るような場合にでも，「用もないのに」ケータイを用いるか，である。

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

3. 親しい者の前で「用もないのに」ケータイ

3.1 「複数の友人たちと会話中」という状況

文献[9]では，親しい者と共にいる状況で行う「用もないのに」ケータイのディスプレイを見る行為について調査した。学生アンケートを行い，家族と会話中・食事中や，一人の親しい友人と会話中よりも，複数の友人たちとの会話中の際に，「用もないのに」ケータイを取り出す頻度が高いことを示した。また，家族と会話中・食事中の場合，一人の親しい友人と会話中の場合，複数の友人たちとの会話中の場合のそれぞれについて，「用もないのに」ケータイを取り出したことのある被験者に，その理由を尋ねた。以下のような答えが典型的なものであった（多数を占めた）。

＊ 家族と会話中，あるいは食事中の場合
- 特に話すことがない.
- 話の内容が意味不明.
- 自分の都合の悪い話題を振られたとき.

＊ 一人の親しい友人と会話中の場合
- 時間が気になるから.
- 会話がとぎれてしまったので.
- 相手もケータイをいじっていた.

＊ 複数の友人たちと会話中の場合
- 友人たちの会話に入れないが，席をたつわけにもいかなかったから.
- 話が面白くないから.
- 何もしないでいるのは居心地が悪いから.

上記の典型的な理由を語る文面において，共通するのは進行中の対面的状況が好ましくないことであり，その調整のために用もないのにケータイを取り出す行為を利用している点である（「時間が気になるから」という答えは例外）。とりわけ，複数の友人たちとの会話中の場合では，回答者達は，進行中の会話の内容そのものが好ましくないことをその理由として挙げている。「用もないのに」ケータイを取り出したことがある被験者達は，そのような場面での居心地の悪さ，所在の無さをしのぐために，ケータイを利用していたと考えられる。ケータイを持ち歩かない時代には，このような行為はかなわず，居心地の悪さにひたすら耐えることがほとんどだったのではないかと推察される。

ここで挙げた3つの場合における各の理由は，2章で述べた公共空間で「用もないのに」ケータイを用いる3つの利用法とも異なっていることにも注目されたい。また，複数の友人との会話中にケータイを取り出す人が多いことは，ケータイが我々の日常的なコミュニケーションの場に着実に入り込んできていることの明瞭な例となるだろう。

3.2 誰かがケータイを取り出す場合の印象

「ケータイのディスプレイを見る行為」は，極めて短期間に急速に人々の間に広まったため，この行為を「見る目」は，いまだ人々の間で洗練されていないと推測される。つまり，その行為を観察する者が，各人各様の印象を受けているのではないだろうか。「ケータイのディスプレイを見る行為」を非言語コミュニケーションとして考察していくためには，その行為そのものを見て受け取る側の印象についても注目せねばならない。非言語コミュニケーションが成立するには，他者の非言語的な行動から何らかの意味や解釈を受け取る者が必要である[12-13]。

複数の友人との会話中にだれかがケータイを取り出す場面を目撃した際に（経験が無い場合にはそのような場面を想定して），どのような印象を持つかを，大学生を被験者として自由回答で依頼したところ，「ケータイを取り出す場面」観察時の印象は以下の5つに分類可能であった。

▶ グループA．失礼な態度に憤慨
▶ グループB．相手の事情を推察
▶ グループC．相手の心情を推察
▶ グループD．自分の対応を反省
▶ グループE．その他

各グループへの分類基準は以下の通りである。

▶ A：ケータイを取り出した者への批判的な表現（「失礼」，「無礼」，「身勝手」など）が含まれている。
▶ B：ケータイを取り出した者に起きた事情（「メール」，「予定」，「何か」など）を推測する表現が含まれている。
▶ C：ケータイを取り出した者の心情（「つまらない」，「わからない」，「退屈」など）を推察する表現が含まれている。
▶ D：自らの対応を省みる（「後悔」，「しまった」など）表現が含まれている。
▶ E：AからDの基準に合わない表現は全てグループEとする。（なお，E．その他に分類される答えのほとんどは，「何も」「普通」「特に」などであった）。

被験者である大学生の答えはグループAからグループEに至るまで，多岐に渡っている。被験者達が観察した（あるいは想定した）行動は，ケータイのディスプレイを見ているだけであり，見かけ上，大きな違いはないと考えられる。しかし，同じような行為から受ける印象にも関わらず，各被験者達が答えた記述は，正反対（「非常識」－「普通」）とも言える異なり方である。

また，グループCとグループDに分類される記述では，進行中の会話についていけなくて居心地が悪い，あるいは内容が退屈である，などの心情を相手が抱いているのでは，という推測が含まれている。この推測内容は，上述の複数の友人との会話中にケータイを取り出したことのあるユーザが，その理由として述べている内容と概ね重なっている。このことは，被験者自らがそのような場面で経験した事柄を，観察した相手に投影した上で理解しようとしていると考えられる。

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

4. ケーススタディ：「気づき」の効果

これまでの調査で派生的に得た知見から，以下のような実験的アンケートを立案した。本章では，その実施意図，プロセスを説明し，結果と考察を記す。

4.1 調査の意図

これまで，筆者らは，大学生らを対象に調査を行ってきた。合計数百名の大学生に対して，「一週間，自分自身の行動を注意深く観察し，「用もないのに」ケータイのディスプレイを見る場面があったら，その場面と理由を5件まで記述してレポートとして提出して下さい」という質問の回答を集計してきた。文献[7]では，その調査結果をまとめて報告している。被験者の一部の者達に対して，上記の調査後に聞き取り調査を行った。一週間自己観察をしたことに対する意見や感想を述べてもらった。すると，その際に多く聞かれたのは，被験者自身に変化があったことである。興味深いのは，自分自身のケータイ利用に関して，

- ▶ 確かに，用もなく使っている。
- ▶ 言われてみると，しょっちゅう使っている。
- ▶ 人前でケータイを出すことに気をつけるようになった。
- ▶ 他の人がケータイを使っているときに，なぜ使っているのか気になるようになった。

などの意見が少なからずあったことである。これらの意見は，彼（女）らが，「ケータイのディスプレイを見る行為」について，自覚的でなかったことと同時に，被験者自身に変化が起きていることを示唆する。この事後的な知見から，以下に述べるような実験的なケーススタディを立案した。

被験者に一定の期間を設けて同じ質問を2度行い，その間の変化を検出する。被験者には2度の質問の間に，自己観察を行って貰い，自らが「用もないのに」ケータイを利用するかどうかを確認して貰った（被験者は全員，なんらかの状況で「用もないのに」ケータイを取り出していたことが確かめられた）。その後に，「用もないのに」ケータイを利用することを多くの人が行っていることを事例をつけて解説した。自己観察と解説というプロセスの前後のアンケート調査を比較して，被験者全体の変化を具体的に取り出す方法を採用した。

4.2 実施プロセス

新潟大学の学生にアンケート調査への協力を依頼した。これまでの大学生対象の調査[7-9]での被験者と重複はない。各プロセスにおいて，集合的に説明を行い，調査への回答は質問用紙への記述を要請した。アンケート調査は2度にわたって行ったが，2度続けて回答に参加してくれたのは60名（主に1回生，18-24際，男性23名，女性37名）である。時期は2008年5月から6月にかけて行った。

4.2.1 第1次調査（2008年5月）

一同に集めた被験者に，質問用紙を配布し，質問への回答を要請した。設問の文言にある「ついケータイのディスプレイ画面を見てケータイを操作する」とは，「用もないのに」ケータイ，すなわち，着信があるわけでも，緊急に誰かに伝えたい用件があるわけでも，すぐに見たいネットのコンテンツがあるわけでもないにも関わらず，ケータイを取り出して操作することを意味することを説明した。ただし，「用もないのに」ケータイを用いるための例については，特に具体的に挙げることはしなかった。説明の後，質問への回答を要請した。

質問は，他の質問と一緒に行ったが，本報告では，以下の4問を取り上げる。

- ▶ 設問1：あなたが家族と会話中あるいは食事中である場面を思い浮かべて下さい。これまで家族との会話中食事中に，「ついケータイのディスプレイ画面を見てケータイを操作したくなる」経験はありましたか？
- ▶ 設問2：あなたが一人の親しい友人と会話中である場面を思い浮かべて下さい。これまで一人の親しい友人と会話中に，「ついケータイのディスプレイ画面を見てケータイを操作したくなる」経験はありましたか？
- ▶ 設問3：あなたが複数の友人と会話中である場面を思い浮かべて下さい。これまで複数の友人と会話中に，「ついケータイのディスプレイ画面を見てケータイを操作したくなる」経験はありましたか？
- ▶ 設問4：あなたが複数の友人と会話中である際，一人の友人が「ケータイのディスプレイ画面を見てケータイを操作」し始めたと想定して下さい。そのとき，あなたは相手に対してどんな印象を持ちますか？

設問1から設問3までは，はい・いいえの2件法で，設問4については，自由記述で回答を要請した。回答時間の制限は設けなかった。回答の記述は匿名で行ってもらった。

4.2.2 ダミー調査と典型的場面の解説

第1次調査終了後に，同じ被験者に対して，1週間自己観察を行うように要請した。自己観察とは，自分自身が何気なく行う行動の内，「用もないのに」ケータイを利用する，すなわち，連絡すべき用件があるわけでも，着信があるわけでも，すぐに見たいネットのコンテンツがあるわけでもないにも関わらず，ふとケータイのディスプレイを見ることがあったら，その場面を注意深く観察して覚えておくことである。そして，その場面を後日，5件程度，自由形式で記述して提出してもらうように要請した。この自己観察と場面の自由記述の要請は，文献[7]で用いた調査と同じ内容であるが，今回はこの質問をダミー調査として用いた。

1週間後に自己観察による場面記述を提出して貰い，さらにその2週間後（つまり，第1次調査からちょうど3週間後），被験者に一同に集合してもらった。ダミー調査の集計を行ったこと，その結果が過去の調査結果とよく類似していることを伝えた。その上で，「用もないのにケータイのディスプレイの見る行為」が行われやすい典型的な場面について，これまでの調査に基づいて，解説を行った。解説内容は，同じ調査結果を分類し

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

た文献[7]における5つの共在状態(「自室でひとり」「不特定のまったくの他人」「特定のまったくの他人」「顔見知り」「友人・恋人・家族」)とその各の典型例5つの場面についての紹介である。

つまり，被験者たちは，1週間の自己観察で自分自身がどのようにケータイを使っているのかを見つめ直し，さらに，同じ大学の他のケータイユーザが，様々な場面で「用もないのに」ケータイ利用を行っていることを確認したことになる。

4.2.3　第2次調査

4.2.2項でのケータイ利用の解説を行った後，再び被験者に質問用紙を配布して，アンケート調査を行った。前回，つまり第1次調査と同じ問題を含んでいることを，この時点で初めて告げて，回答を要請した。第2次調査でも他の設問を含んでいたが，今回は，4.2.1項で述べた4つの設問を取り上げる。4つの設問の文言は第1次調査と全く同じである。なお，回答の記述は第1次調査と同様，匿名で行ってもらった。

4.3　結果1：経験の変化

表1は，設問1，2，3についての2度のアンケート結果を示している。第1次調査と第2次調査での「はい」と答えた被験者（用もないのにケータイを取り出した経験者）の実数と割合を表示している。図1では，表1に示した経験者の割合を設問毎でマーク別（設問順に，◇，△，＊）にプロットした。横軸が2度の調査別を示して，縦軸が被験者の割合を表す。

表1と図1にあるように，設問1，設問2においては，「はい」と答えた被験者の割合にほとんど変化がなかった。一方で，設問3(60人中，27人→46人)では割合が有意に増加している(棄却率 $p<0.01$ のU-検定で有意差あり)。つまり，複数の友人と会話中の場面では，「用もないのに」ケータイを取り出した経験がある，という被験者が増加している[3]。

表1　「はい」と答えた被験者の実数と割合（設問1,2,3）

	設問1	設問2	設問3
第1次調査	20 (33%)	21 (35%)	27 (45%)
第2次調査	22 (37%)	24 (40%)	46 (77%)

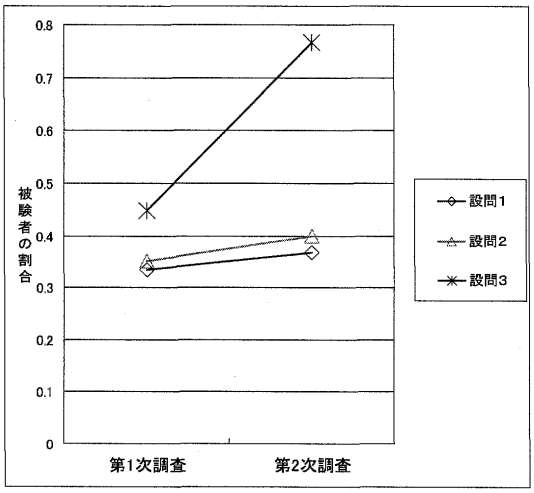

図1

4.4　結果2：印象の変化

表2は，4.2.1項の設問4についての結果を示している。第1次調査，第2次調査の結果とも，3章で述べた印象の分類法を使ってグループAからグループEまで分類して，各グループの被験者の実数と割合を表示している。各グループの被験者の割合は，図2にプロットしている。第1次調査は（●），第2次調査は（■）のマークをつけて，区別して表示している。

表2と図2にあるように，グループA，Bに分類される被験者数は減少し，代わりにグループC, Dに分類される被験者数は増加している[4]。グループEも若干減少している。棄却率 $p<0.1$ のU-検定で，グループCとDを合わせた割合の変化(60人中，20人→30人)を検定したところ，2度の調査結果の差に有意な傾向が見られた。つまり，複数の友人との会話中にケータイを取り出した者に対して抱く印象によって被験者を分類したところ，ケータイを取り出した者の心情を推察しようとするグループCと心情を推察した上でさらに自己反省を行うグループDの2つのグループが増加する傾向にあることが示されている。

表2　分類グループに属した被験者数と割合（設問4）

	A	B	C	D	E	計
第1次調査	13 (22%)	12 (20%)	19 (32%)	1 (2%)	15 (25%)	60
第2次調査	10 (17%)	7 (12%)	27 (45%)	3 (5%)	13 (22%)	60

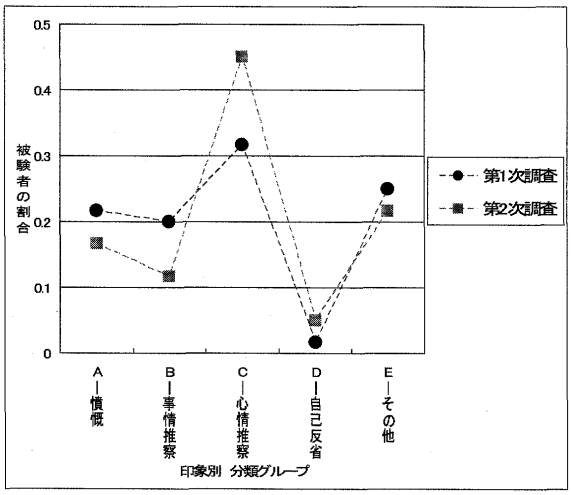

図2

4.5　考察1：経験の変化

家族と会話中・食事中あるいは一人の友人と会話中に「用もないのに」ケータイのディスプレイを見た経験のある被験者の割合に明瞭な変化は見られなかった。一方で，複数の友人との会話中に「用もないのに」ケータイのディスプレイを見たことのある経験者の割合は有意に増加した。第1次調査と第2次調査の間の期間はちょうど3週間である。その3週間の間に設問1と設問2で尋ねた経験者の割合は，大きな差はなかったが，設問3ではケータイ利用の経験者の割合が有意に増加している。

2000年代後半では，高校生・大学生のケータイ所有率が9割を超えていることを，多くの調査結果が示しており[例えば，14]，日常的なケータイ利用の仕方をわずか3週間の間に変化させる被

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

験者は多くはないだろう。第1次調査と第2次調査の間で設問3の回答に変化があった被験者たちのほとんどが，複数の友人の前で用もないのにケータイを取り出す行為を新たに経験したのではなく，自らがケータイを利用する行動に注意し始め，自分自身が他者の前でケータイを取り出す行為を自覚するようになった，というのが妥当な解釈であると思われる。つまり，第1次調査と第2次調査の間に行った自己観察と第2次調査の直前に被験者に与えた解説が，彼ら自身の行動理解に変化を与え，結果として自らの経験に対する認識が変化したのだと考えられる。

設問3では，被験者の回答に大きな変化があった一方で，設問1，2ではほとんど変化が見られなかった。この違いは，家族や一人の親しい友人との関係と複数の友人との関係の違いがもたらすものと考えられる。用もないのにケータイを取り出した理由の典型的例を3.1節に紹介している。「家族と会話中あるいは食事中」の場合が設問1，「一人の親しい友人と会話中」の場合が設問2，「複数の友人と会話中」の場合が設問3の場面に，それぞれ相当する。複数の友人と会話中の場合の文面には，他の2つの場合のそれと異なるニュアンスが表現されている点に注目されたい。「席をたつ」「居心地が悪い」などの表現は，進行中の会話の状況の悪さが対面的状況からの離脱や中座につながりうることを示唆している。会話の成立以前に関係の強い家族や一人の親しい友人に比べると，複数の友人の中には関係が希薄である者が混じる場合もあり，会話の内容の悪さが，対面的状況そのものの不成立に繋がる可能性が高い。複数の友人と会話中であるとは，比較的つながりの弱い関係であるが，それでもなお，被験者達が，ケータイを取り出しながら会話の場に留まっていたのであれば，彼（女）らは対面的状況から離脱しなかったこと，つまり，対面的状況をそのまま継続する意向があったことを意味する。

つまり，本調査の一部の被験者達は，複数の友人達との会話中，会話の内容が好ましくない状況になった際に，対面的状況から離脱せず，その場に留まるために，用もないのにケータイを取り出していたことが示唆される。用もないのにケータイを取り出す行為が，複数の友人との会話中という関係を維持するために利用されていたとも解釈可能である。そして，そのうちの何割かのユーザは，この行為に自覚的でなかったが，4.2.2節で述べたダミー調査とケータイ利用の解説を得たことをきっかけとして「気づき」を起こし，自らの行為を自覚するに至った，と推察できる。

4.6 考察2：印象の変化

複数の友人との会話中に，誰かがケータイを取り出す場面を目撃した際の印象に対して，第1次調査と第2次調査の間で変化する傾向が見られた。相手の心情を推察するグループCと自らのコミュニケーション過程を反省するグループDを合わせて，被験者が増加する傾向にあった。ここでも，ダミー調査による自己観察と解説が被験者に影響を与えており，他者の行動への理解の仕方が変化する傾向にあったのだと推測できる。

付言しておくが，4.2.2項におけるダミー調査の説明を行うプロセスでは，被験者に自らの行為を観察して客観的に記述することを要求したのみである。ダミー調査の結果を解説するプロセスでは，他の多くのケータイユーザも同様のことを行っていることを実例として与えたのみである。ケータイを利用する者の心情を推察することを被験者達に奨励したり，それを美徳として評価したりする発言は一切行っていない。被験者の何割かの者達は，ケータイ利用に関する自己観察と解説を通して，「ケータイのディスプレイを見る行為」に対する「気づき」を起こし，その結果として，他者の行為を理解し直す傾向にあったと考えられる。彼(女)らは，相手の心情を理解しようとしたり，自らのコミュニケーションの不足を反省したりする傾向にあると推察できる。

5. まとめ

5.1 「気づき」が意味すること

本稿では，「用もないのに」ケータイを取り出す行為に対する「気づき」が，被験者（大学生）にどの程度影響しうるのかを顕在化するために，大学生を対象にケーススタディを行った。「家族と会話中・食事中」「一人の親しい友人と会話中」の場合に比べ，「複数の友人たちと会話中」の場合には，「気づき」を起こして自らの経験を再発見する被験者が多いことが示された。また，被験者達は，他者の行為に対する解釈を変更して，その心情を理解するように変化する傾向にあった。

このことは少なくとも2つの事柄を意味する。

一つは，変化を起こした被験者たちは，「ケータイのディスプレイを見る行為」に関する自己観察とその解説を通して，自身や他者の行動を再発見・再解釈を行う能力を持っていた点である。彼（女）らは，きっかけを与えられただけで，自発的に自己と他者に対する理解の仕方を変えている。

もう一つは，被験者(大学生）がこれらのきっかけを与えらない環境にあった点である。第1章でも述べたとおり，「ケータイのディスプレイを見る行為」は短い期間に急速に広まった行為であるが，一方で，この行為をどう解釈するか，という議論は陽にはなされておらず，そのきっかけさえ与えられていないと言えるだろう。彼らは自身の「ケータイのディスプレイを見る行為」がどういう影響を与えているかを知らないままに，気まずさや居心地の悪さを感じた際に，ふと行ってしまっていた可能性が高い。

実際に用がある場合はもちろんのこと，「用もないのに」ケータイを用いる行為は，それが意図的であるにせよ，ないにせよ，何らかの印象を目前の人間に与えてしまう。彼（女）らが，自らの意図しない非言語コミュニケーションを行っていたならば，本人の知らないところで，想像外の齟齬を発生させていた可能性もある。ケータイ利用の場面やタイミングによっては，無用の軋轢を周囲と生んだり，不利益を被ったりする可能性も充分にある。彼（女）らは，既にケータイ利用を介した非言語コミュニケーションが行き交う場に置かれていると考えられるため，「ケータイのディスプレイを見る行為」について，「気づき」を得ることは必要であると考えられる。

5.2 新しい「メディア」

ケータイは，時に排除の対象となるほど[15]，人々のコミュ

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

ニケーションに影響を与えている。ケータイの遠隔通信機能による対面コミュニケーションへの弊害を語る記述は，学術的・非学術的なものをあわせて枚挙にいとまがない。その多くは，対面コミュニケーションにおける伝統的な作法や儀礼が損なわれていくこと，コミュニケーション能力が相対的に低下してゆくことを指摘する。筆者らもこれらの指摘に概ね同意するものの，同意するだけでは不充分と考える。ほとんどの人間がケータイを持ち歩く現在，それらの指摘を前提とした上で，さらに一歩踏み出した議論や考察が必要である。既に，ケータイのない時代に回帰することはまずあり得なく，またその一方で，ケータイを利用していく行動の中に，新しい作法や儀礼が芽生える可能性があるからである。

もしも，新しい作法や儀礼が生じるならば，それらを語るフレームワークとなるのが，ケータイを利用する行動を非言語コミュニケーションと捉える観点であろう。他者がケータイを利用する行動から，他者の心情を読み取ろうとする者がおり，「ケータイのディスプレイを見る行為」を見直すきっかけが与えられただけで，自らの行為の意味までも見直す者も居る。このことは，ケータイを取り出す行為が，弊害になるだけでなく，対面コミュニケーションの一経路として活用される可能性さえあることを示唆する。つまり，「ケータイのディスプレイを見る行為」は（その精度は不確かながらも），自己の態度を表す／他者の心情を読み取る「メディア」になりうると言えるだろう。

24時間30センチ以内にあると言われる段階になった現在，誰かと対面のコミュニケーションを行う際に，ケータイがなんらかの形で関わってくることを避けることは難しい。誰かと共に居る際に，ケータイを扱う行為自体がなんらかのコミュニケーションを発生させうることが，明示的に理解されていくべきである。とりわけ，非言語的なアピールを行うためにケータイを用いる場合があること，ケータイを用いる身体操作そのものを記号的に用いるやりとりが日常的に遂行されていること，そして，これらのやりとりが人々の間で洗練されつつあることに注意が払われるべきである。我々は，ケータイという情報機器を用いて，その本来の機能とは別の利用法で，新しいコミュニケーションを交わす文化を形成する途上にあるという見方も可能である。今後，「ケータイのディスプレイを見る行為」が非言語コミュニケーションとして広く認知されていく必要があると考える。

本研究は日本学術振興会科学研究費（基盤研究C「「ケータイのディスプレイを見る行為」の非言語コミュニケーションにおける役割調査」）を活用して行われた。

注

(1) 歩行中のディスプレイ凝視や照明をおとしたイベント会場における液晶装置の光の散乱などが，「ケータイのディスプレイを見る行為」の代表的な迷惑行為である[16]。

(2) ゴフマンは，同じ空間に居合わせた二人（あるいは，二人以上の人々）がお互いに一緒になって単一の相互行為（例えば，世間話，食事，ある種のゲームなど）を行うようになり，それを維持しようすることを「対面的かかわり」（あるいは「出会い」）と呼ぶ[11]。

(3)「複数の友人と会話中」に「用もないのに」ケータイを取り出した経験のある者の割合は，4.3節の図1にプロットしているように，第1次調査で約45%であり，第2次調査になって約77%へ増加している。一方，同じ質問をした文献[9]においては，「複数の友人と会話中」に「用もないのに」ケータイを取り出した経験のある者の割合は約59%となっている。文献[9]における被験者の割合は，本稿の第1次調査と第2次調査の中間的な値となっている。これらの値の差は，文献[9]で行った調査の被験者の選び方に起因していると推測できる。文献[9]の調査では，第1回から第3回まで3度に分けて調査を行っているが，そのうちの第1回では（当時）1年生と（当時）3年生が約半分ずつ混じっており，第2回では（当時）1年生のみ，第3回では（当時）3年生のみが被験者になっている。1年生は，自己観察の要請を受ける前であり，上級生は，文献[9]で行ったアンケート調査開始の1年以上前に，筆者（中村）の講義に接しており，既に自己観察の要請を受けている。このような「気づき」前，「気づき」後の被験者集団が混在した調査であることから，文献[9]のアンケート調査は，第1次調査と第2次調査の中間的な値をとることになったと推測される。

(4) 各グループにおける被験者の割合は，文献[9]の値と差はあるものの，大まかな傾向は一致している。しかし，あくまで地方大学生の一部の者の傾向を示すに過ぎないため，一般化した考察のためにはさらなる調査が必要である。

参考文献

[1] ドコモ早わかり講座，NTTドコモ公式HP http://www.nttdocomo.co.jp/corporate/ir/personal/quick/index.html.

[2] “今年1年で最も利用した携帯の機能は「メール」5割半，「音声通話」2割強”（2008年12月22日），アイシェアrTYPEリサーチ，http://release.center.jp/2008/12/2202.html.

[3] “ケータイとライフスタイル～ケータイユーザー意識調査～”（2008年1月22日），プレスリリース，ネットエイジア，http://www.mobile-research.jp/investigation/research_date_080122.html.

[4] 携帯電話の番号ポータビリティ広報サイト，総務省公式サイト，http://www.soumu.go.jp/joho_tsusin/mnp/.

[5] モバイル・コンテンツ・フォーラム：『ケータイ白書2009』，インプレスR&D，2009.

[6] “後払い電子マネー「iD」の会員数が全国で1,000万を突破”（2009年1月7日），報道発表資料，NTTドコモ公式サイト，http://www.nttdocomo.co.jp/info/news_release/page/090107_01.html.

[7] 中村隆志：“非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」”，情報文化学会誌，14(1), pp.31-38, 2007.

[8] 中村隆志：“多重文脈性をまとうツールとしてのケータイ”，情報文化学会誌，15(1), pp.12-19, 2008.

[9] 中村隆志：“親しい者と行う非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」とその多様化”，情報コミュニケーション学会誌，Vol.4, No.s1&2, pp.4-9, 2008.

[10] 中村隆志，大江宏子：“公共空間における非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」”，情報社会学会誌，Vol.4，No.1（印刷中），2009.

[11] E. ゴフマン：『集まりの構造』（丸木恵祐子・本名信行訳），誠信書房，1980.

[12] 佐藤綾子：『非言語的パフォーマンス』，東信堂，2003.

[13] V. P. リッチモンド，J. C. マクロスキー：『非言語行動の心理学』（山下耕二：編訳），北大路書房，2006.

[14] 高校生の消費に関する調査，調査・研究の報告書，財団法人日本青少年研究所公式HP，http://www1.odn.ne.jp/youth-study/

[15] “学校へのケータイ持ち込み禁止は中学校99%，小学校94%－文科省調査”（2009年2月4日），MOBILE CHANNEL, CNET Japan, http://japan.cnet.com/mobile/story/0,3800078151,20387607,00.htm.

[16] モバイル社会研究所：『モバイル社会白書2006』，NTT出版，2006.

NII-Electronic Library Service